

象徴化された「三」に潜在する意味世界パラダイム

—「三」をめぐる諺・格言を事例として—

田中 亨胤

古来より何げなく使っている「諺」「格言」には、意義深い「生活の知恵」が潜在している。本研究では、「三」をめぐる「諺」なり「格言」を事例として、「三」に潜在する意味世界を可視化し、「三」の解釈スタイルを明らかにすることに研究の目的を置く。『ことわざ』（大辞典）を主たる基礎資料として、「三」を象徴化する事例を抽出し、「三」から示される潜在的メッセージを把握し、その特色の典型化を試みることにする。

キーワード：象徴としての三、思考スタイル、持続可能な生き方の知恵、アンビバレント

I はじめに

本研究課題は、すでに公表している「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（『京都文教短期大学研究紀要第56集・2018年』／『京都文教短期大学研究紀要第57集・2019年』／『京都文教短期大学研究紀要第58集・2020年』）の発展的な課題である。これまでの一連の研究において採用した手法と同様の問題意識、課題の設定、資料収集方法等により、本研究を進めるものである。

日常生活世界において人口に膾炙する「ことわざ」（諺／格言）は、自分の言葉では伝えきれない、語りきれない人知の思いを、端的に示的確に表現してくれる言語文化ツールである。感覚的にかつ理屈抜きに、その意味世界を納得してしまう説得力を内包している魔法の言語文化ツールあるいは装置である。

「ことわざ」は、世俗的な言説であるからして、そのままにして科学的・学問的理論的仮説なり根拠があるわけではない。「ことわざ」は、さりとて曖昧なる言語文化にとどまるものであるとも言い難い。過去からこれまでの素朴なる長い

庶民生活の感覚に潜在する無理のない生き方や考え方の基本を示唆する。この意味で、「ことわざ」は、社会的文脈が結果として組み込まれた言語文化遺産である。現在においても日常生活・暮らし・社会的行動等にも少なからずインパクトを与えている実践的言語文化である。

「ことわざ」の表現方法においては、「比喩」「誇張」「反語」「掛けことば」など、多様である。「ことわざ」は、短い言語表現でもって語られるところこそ、印象的なメッセージを発信している。その言説や意味には味わい深いものがある。受け止める側の自らのこれまでの経験値や想像力に照らして受け止めることにも有効である。時には個人の域を超えた多くの人たちの納得の真実となることもある。「ことわざ」に時代や風土などの背景を重ねることも、「ことわざ」のぶれない読み取りになる。語り継がれていく「ことわざ」には、その時折の必ずしも明示されない固有な社会的風土なりが背景にあり、内包されているからである。

II 研究の目的

1. 問題の所在

本研究は、主題および副題に示す「三」に課題の焦点を置くものである。「ことわざ」には、顕在的にも潜在的にも様々な視座や示唆が組み込まれていることは、本研究の課題の前提となるすでに公表している一連の「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）」において明らかにしているところである。¹⁾

「三」は、「算数」「数学」における概念を基本にするものである。「数」「量」「順序」を表す操作概念である。この操作概念を基軸にして様々な「ことわざ」が、言語文化として創出され、日常の生活世界において用いられている。理屈を抜きにした納得の言語表現ツールとなっている。「数理科学」の世界では、「ピタゴラスの定理」「三次元」「三段論法」が即座に思い浮かぶ。「生活文化」の世界では、「三人寄れば…」「三つ子の魂…」「団子三きょうだい」「三者三様」などが用いられる。あるいは「芸術」の世界では、「三原色」が基本とされる。

何故にこの「三」なのか。「三」には巧妙に組み込まれている論理的仮説の背景基盤がありそうである。「三」は、われわれ人間の無理のない「思考スタイル」を象徴するものであろうか。

2. 研究の目的

本研究では、上記の問題の所在をふまえ、主として次の点を明らかにすることを、研究の目的とするものである。「三」にかかわる「ことわざ」に潜在している「思考スタイル」としての論理的視座を可視化することである。なお、補足的にはあるが、これまでに学術的に解き明かされ、提唱されてきた教育理論との接点なり関係性を把握することにも、隠れた研究の目的を置くこととする。

これら2つの目的を探究することによって、「三」の概念を包含する「ことわざ」には、生活の中での感覚的でありながらも確かな経験値としての「世俗的視座」あるいは「持続可能な視座」であることも指摘することとする。

なお、本稿では、「三」をめぐる「ことわざ」の数々を事例として、「ことわざ」としての言説に組み込まれている「思考スタイル」あるいは「解釈スタイル」を可視化することも試みることにする。

III 研究の方法

1. 基礎資料

○基礎資料1：「北村孝一・監修『故事俗信ことわざ大辞典』（第二版）、小学館、2012年」（基礎資料は、1982年に第一版発行。第二版は、第一版を全面的に改訂。）

「基礎資料1」は、(株)小学館創立九十周年にあたる2012年に「小学館創立九十周年記念企画」として発行。日本の「ことわざ」、中国に起源を持つ「故事成語」、西洋から入ってきた「ことわざ」、日本各地の「俗信」などを集大成。実際に文献上に現れた使用例を、原則として近世以前に限って掲載。収録項目数は、約43000項目。監修は、北村孝一氏。編集委員として、佐竹秀雄・武田勝昭・伊藤高雄の三氏が参画。

○基礎資料2：各種「国語辞典」（旺文社他）

その他、田中亨胤「保育の基本・用語集」（ひかりのくに、2013）をはじめ、各種の書籍・雑誌等を参考資料とした。

2. 資料分析条件

本研究における「問題の所在」および「研究の目的」に照らして、分析の枠組みを次のように想定した。「三」にかかわる「ことわざ」は広範囲にわたることから、第一水準の読解として

の категорияは、「ことわざ」に合わせた設定にした。(具体の категорияは、「3. 資料分析手順」において設定・表示)

拡散的な categoria 設定になるものの、「三」に込められた響きには、様々な「調子」がある。その「調子」に込められたメッセージを、キーワード化し、「ことわざ」を抽出した。

3. 資料分析手順

上記「2. 資料分析条件」をふまえて、以下の手順によって、資料分析による結果の引き出しを行うこととした。

- 主として『基礎資料1』に掲載されている「ことわざ」の検索
- 五十音順見出し項目に基づく掲載の約43000項目から、「三」の概念を内包する「ことわざ」の抽出
- 『基礎資料1』に記載されている各「ことわざ」の意味世界のキーワード化による概要把握
- 「ことわざ」事例に記載された観点のキーワードに基づく「category・コード」の登録

4. キーワード・categoryの概念と頻出数

それぞれの「ことわざ」におけるキーワードについては、その意味世界の具体性を残すことを考慮し、緩やかに類型化し、表のように25種の「category・コード」(詳細データ一覧については論文末掲載の表を参照)を設定した。

各 category の概念については、以下のよう
にキーワード化して把握し、「ことわざ」のプロットを行った。具体的な把握については、「IV 資料分析」において取り上げる category 別事例の中で確認することとする。各 category に示す()の中の数字は、サンプル数である。25種の category・コードに対応するサンプル総数は、526 事例である。

<category・コード>

1. 「長い期間」(58)：延々と続く長き期間
2. 「短い期間(あつという間)」(33)：思う以上に過ぎていく時間や期間
3. 「それなりの期間」(43)：やがて、いずれは過ぎていく時間や期間
4. 「時の流れ」(11)：逆らわずやり過ごす時間の経過
5. 「距離感」(17)：思う以上の距離の感覚
6. 「繰り返し」(50)：同じようなことの度重
7. 「いたるところ」(19)：いずれにおいても
8. 「加減(かなり・相当な)」(12)：思った以上のこと
9. 「加減(わずかな)」(69)：ちょっとした加減
10. 「加減(ほどよい)」(13)：心地よい加減
11. 「釣り合い(案配・塩梅)」(5)：調和のとれた具合
12. 「多人数」(22)：複数の集まり
13. 「常識・あたりまえ・習わし」(21)：世間の普通
14. 「たとえ」(25)：例示
15. 「象徴」(46)：代表的な類の象徴
16. 「しゃれ」(6)：語呂合わせ的な洒落
17. 「リズム・拍子」(7)：響きの心地よい表現
18. 「基本・要素」(31)：不可欠の基盤や条件
19. 「ねうちの評価」(5)：高い評価
20. 「それなりの費用」(8)：思わぬ出費
21. 「忌避」(17)：避けたい状況や思い
22. 「昔々の」(2)：さかのぼる過去
23. 「順番」(1)
24. 「不透明」(1)
25. 「その他」(2)

IV 資料分析の結果概要

1. 「あ～お」の欄

「あ」欄においては、81 事例を抽出した。5.0% 以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「そのうちの期間」(21.0)「常識・習わし」(13.6)「時の流れ」(8.6)「たとえ」(7.4)「基本・要素」(6.2)

(1)「それなりの期間」の事例

- 「商い三年」(辛抱の期間)
- 「顎振り三年」:年月がかかる。(必要な年月)
- 「茨の中にも三年」(辛抱の期間)
- 「石の上にも三年」:「三年居れば温まる」に同じ。(辛抱の期間)

上記の事例では、「三年」を一区切りとする概念が強調されている。「辛抱」「必要」と重ねた努力による課題の克服の「ことわざ」群である。「三年」のほかに「一年」「一代」「三代」等も用いられる。

(2)「常識・習わし」の事例

- 「後入り三杯」:「駆け付け三杯」に同じ(酒席の常識的罰則)
- 「今入り三杯」:「駆けつけ三杯」「遅れ三杯」に同じ。(社交の基本)
- 「一生に三つは仲人をしておくもの」(基本条件としての三つ)

上記の事例では、「三杯」を世俗的な常識あるいは習わしとすることが強調されている。「三つ」(三回・三度)等も用いられる。

(3)「時の流れ」の事例

- 「暑さも三月」(やり過ごす短い期間)
- 「井戸の中の独り言も三年たてば知れる」(時の流れ・いずれ時がたてば)
- 「いらぬ物も三年たてば用に立つ」(いずれ時がたてば)

上記の事例では、「月」「年」が、「時がたてば」の概念と重ねて強調されている。力むことない

生活や暮らしぶりの構えにかかわる「ことわざ」である、

(4)「たとえ」の事例

- 「後は三条っ払い」(新潟の三条:後払いのたとえ)
 - 「雨垂れは三途の川」(危険極まりない三途)
 - 「肋骨の三枚目へ障る」(癩・癩に障るたとえ)
- 上記の事例の「三」のほかに、「三本」「三人」等も用いられる。

(5)「基本・要素」の事例

- 「怒りは逆徳なり、兵は凶器なり、争いは末節なり」(三つの元凶)
- 「衣食住は三つに止まる」(関心のある三つの基本)
- 「益者三楽(さんごう)損者三楽」:「益者三友損者三友」も類似。(基本要素となる三)

上記の事例では、生活・暮らし意識としての前提となる基本を示した「ことわざ」に重点が置かれる。

2. か～こ欄

「か」欄においては、41 事例を抽出した。5.0% 以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「長い期間」(14.3)「それなりの期間」(14.3)「それなりの費用」(12.2)「短い期間」(9.8)「リズム・拍子」(7.3)

(1)「長い期間」の事例

- 「草花三年」(長い年月)
- 「公事三年」(長引く年月)
- 「好客三年店を変えず、好店三年客変えず」(長年の三)

上記の事例では、「三年」を用いて「長い期間」を感覚的印象として強調している。「三年」のほかに「三代」「三世」「三秋」(「三秋の想い」)等も用いられる。

(2) 「それなりの期間」の事例

- 「權は三年櫓は三月」(要する長い年月)
- 「倶舎は三年、唯識は一代」(修行に要する期間)
- 「首振り三年ころ八年」:「ぼつぼつ三年波八年」に同じ。(修行に要する期間)

上記の事例では、「三年」を必要とする期間の概念が強調されている。それなりの地道な努力、継続的な修行の蓄積をあらわす「ことわざ」となっている。

(3) 「それなりの費用」の事例

- 「雁一匹さえ矢は三銭」(それなりの費用)
- 「五両で帯買うて三両でくける」(追加の費用)
- 「薦の上にも三貫」(相応の費用)

上記の事例では、金銭を示した、「それなりに必要となる費用」を概念として示している。「三銭」「三両」「三貫」はそれぞれに金銭的価格には大いに違いがあるものの、その違いを感じさせない重みのある金銭的費用の概念が強調されている。

(4) 「リズム・拍子」の事例

- 「薬を売る者は両眼、薬を用いる者は一眼、薬を服する者は無眼」(基本の三拍子)

この欄においては、多くの事例は把握されないものの、「三」に潜在する調子が「ことわざ」に表現されている。ことばとしての心地よい「三拍子」が基になっている。

3. さ～そ欄

「さ」欄においては、各欄では最も多くの212事例を抽出した。5.0%以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「長い期間」(13.2)「加減(わずかな)」(11.3)「くりかえし」(10.8)「象徴」(9.4)「多人数」(6.6)「たとえ」(6.6)「忌避」(6.6)「いたるところ」(6.1)「基本・要素」(5.2)

(1) 「長い期間」の事例

- 「三年醤油(味噌)で煮染めたよう」:「三番醤油で煮染めたよう」と同じ。(長い期間)
- 「三年園を窺わず」(長期間)
- 「三年火棚に晒したよう」(長期間)

上記の事例では、「三年」が基本軸に置かれて、「長期間」の概念が強調されている。「わずか三年」とする受け止めの「ことわざ」もあるものの、「三年」を長期間の概念でもって用いる「ことわざ」が多い。

(2) 「加減(わずかな)」の事例

- 「三寸流れて水清し」:「川下三寸」に同じ。(わずかの距離)
- 「三文とも思わぬ」(ごくわずか・安価)
- 「舌三寸に胸三寸」(ちょっとした)

上記の事例では、「三文」「三寸」が「わずか」の概念として強調されている。いずれも微々たる金額や寸法であるから、その概念をそのまま用いた「ことわざ」である。

(3) 「くりかえし」の事例

- 「三顧」:「三顧の礼」に同じ。(礼を尽くす姿)
- 「三度諫めて用いざれば身を報じて去る」(繰り返しの三度)
- 「三度の数が合う」:「二度あることは三度ある」も類似。(繰り返しの三度)

上記の事例では、たんなる回数ではなく、「くりかえし」を基本概念とする「ことわざ」となっている。

(4) 「象徴」の事例

- 「讃岐の三白」(三つの特産)
- 「剃り立て三つ」(子ども)
- 「三男の三郎」(素直ではない象徴)

上記の事例では、「三」を代表とした「象徴」が強調されている。必ずしも因果関係が感じられるものではないものの、世俗的には思わず納得してしまう「ことわざ」でもある。

(5)「多人数」の事例

- 「三人寄れば金をも溶かす」:「衆口金を鏝かす」に同じ。(世評の怖さ)
- 「三人寄れば文殊の知恵」:「三人寄れば師匠の出来」に同じ。(知恵の出る三人の集まり)
- 「三人あれば公界」:「三人寄れば公界」「三人知れば世界中」「三人寄れば人中」に同じ。(公的な世間)

上記の事例では、「三人」に「客観化」の意味と機能を包含させた「ことわざ」となっている。人数的には「三人」は大勢ではないものの、「複数」「多人数」「客観」「公」「一般」などの意味に般化する「ことわざ」である。

(6)「たとえ」の事例

- 「三戸をひそめる(鎮める)」(三つの感覚部位)
- 「三国一」(広い世界)
- 「霜枯れ三月」(比喻・荒涼)

上記の事例では、「三」の概念の置き換えをして表現している「ことわざ」となっている。「三戸」「三国」「三月」は、それ自体には格別の固有なる概念はないものの、ことばを添えて、「三」を印象付ける「ことわざ」となっている。

(7)「忌避」の事例

- 「三月は去られ月」(避けたい三月)
- 「三月平日犬も食わぬ」(避けたい三月)
- 「三人旅の一人乞食」:「三人で歩くと仲間はずれができる」「三人道中すれば一人乞食」「三人宝引きの一人乞食」「三人寄れば取り除き講」に同じ。(難しい関係)

上記の事例では、「三」に込められた怪しく呪われた不吉なる概念を込めた「ことわざ」となっている。「三月」「三人」はアンビバレントな概念であり、その一方の忌避する側面の意味を強調する「ことわざ」となっている。

4. た〜と欄

「た」欄においては、32事例を抽出した。5.0%以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「加減(わずかな)」(21.9)「短い期間」(15.6)「長い期間」(9.4)「それなりの期間」(9.4)「時の流れ」(9.4)「基本・要素」(9.4)「距離感」(6.3)「加減(かなり)」(6.3)

(1)「加減(わずかな)」の事例

- 「只匆三文の得」(少しは)
- 「粒三文盗みはせじ」(わずかな)
- 「友に交わるには須く三分の俠気を帯ぶべし」(少しばかり)

上記の事例では、金銭としての「三文」、割合としての「三分」に「わずかな」の概念を重ねて、加減を強調している。「三文」「三分」を高く評価する「ことわざ」事例は把握できない。

(2)「短い期間」の事例

- 「天に三日の晴れなし」(長続きしない)
- 「土用入り三日に秋風が吹く」(すぐさま)
- 「虎生まれて三日にして人(牛)を食らうの気あり」(すぐさま)

上記の事例では、あっという間に過ぎ去りゆく期間を強調する「ことわざ」となっている。「三日」にその概念を重ねているものの、アンビバレントな用い方もある。

(3)「長い期間」の事例

- 「高尾七代、薄雲三代」(由緒ある長続き)
- 「徒居り三年の惑い」:「一時の徒居は三年の惑い」(ずるずると三年も)
- 「蜥蜴の三年干し」(長期間)

上記の事例では、「三年」「三代」に「長期間」の概念を重ねる「ことわざ」となっている。「三年」「三代」のいずれも「長期間」を示す代表的なものである。なお、「た〜と欄」において把握されないものの、他の欄においては「三年」「三

代」を「いずれ時がたてば」「しばらくすれば」などのアンビバレントな取り扱いとしての「ことわざ」も散見される。

(4) 「それなりの期間」の事例

○「旅立ちて三日がうちは庭を掃かず、櫛を見ず」(しばらくの間)

○「長者の車も借りれば三年」:「殿の馬も借れば三日」(一定の期間内は)

○「朝恩に背く者は近くは百日遠くは三年を過ぎず」(一定の期間であれば)

上記の事例では、「三日」「三年」を例示とした「ことわざ」となっている。「しばらくの間」の響きが内包されている「ことわざ」となっている。

(5) 「時の流れ」の事例

○「長者三代」(いずれは)

○「大名の三代目」(いずれは)

上記の事例では、「三代」を「長い期間」として受け止めるものでもなく、「長い期間」に立ち向かうものでもない、曖昧な向き合い方を示唆している「ことわざ」となっている。

(6) 「基本・要素」の事例

○「鯛の三つ道具」(東部の骨)

○「妻に三不去あり」(基本の条件)

○「読書三到」(三つの基本)

上記の事例では、「三」の中に「基本」「不可欠なる要素」の概念を重ねている「ことわざ」となっている。物事に向き合う心構えなり覚悟を示す「ことわざ」となっている。

(7) 「距離感」の事例

○「隣一里豆腐屋三里」(不便なる距離感)

上記の事例では、「一里」「三里」を例示として、生活圏にある隣や豆腐屋が必ずしも気軽に行き来できる距離にはない不便なる距離感を強調した「ことわざ」となっている。

(8) 「加減(かなり)」の事例

○「立ち聞きは地が三寸凹(くぼむ)」:「立ち聞きすると三尺地の下の虫が死ぬ」に同じ。(影響大)

上記の事例では、わずか「三寸」が、かなりの「三尺」にも影響することを比較しながらの強調を示している「ことわざ」となっている。

5. な～の欄

「な」欄においては、16事例を抽出した。10.0%以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリ・コードになる。「加減(わずかな)」(43.8)「くりかえし」(18.8)「長い期間」(12.5)「短い期間」(12.5)

(1) 「加減(わずかな)」の事例

○「盗人にも三分の理(あり)」(それ相応の)

○「喉三寸」(わずかな間)

○「猫は土離れ三寸にして身をかわす」(わずか三寸)

上記の事例では、「三分」「三寸」のそのものの概念を強調した「ことわざ」となっている。「わずか」「微々たる」を印象づける「ことわざ」である。「三分」「三寸」を、「かなり」「大いに」等の例示として強調する「ことわざ」は、「他の欄」においても把握できない。「三分」「三寸」は「加減(わずかな)」の固定的概念である。

(2) 「くりかえし」の事例

○「二度あることは三度ある」(繰り返し)

○「二度目の見直し三度目の正直」(手堅さ)

上記の事例では、「くりかえし」の例示表現として「三度」が用いられている。「さ～そ欄」においては、「三度」を例示する「ことわざ」が多く把握される。

(3) 「長い期間」の事例

○「名主を三代すれば屋敷に草が生える」(長年)

上記の事例では、「三代」を例示して、「長い期間」を強調する「ことわざ」となっている。「さ

～そ欄」において、「三代」を例示する「三代相恩」「三代相伝」の「ことわざ」もある。

(4)「短い期間」の事例

○「猫は三月を一年とす」：「犬の一年は三日」に同じ。(成長の早さ・短期間で)

○「猫は三年の恩を三日で忘れる」(わずか三日)

上記の事例では、人間の命の「尺度」あるいは「物差し」に対比させて、「三月」「三日」に「短い期間」の概念を重ねている。「三月」「三日」は、「他の欄」では、むしろ「長い期間」として強調する「ことわざ」も把握される。

6. は～ほ欄

「は」欄においては、50事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。5.0%以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「長い期間」(14.0)「加減(わずかな)」(14.0)「象徴」(12.0)「短い期間」(10.0)「くりかえし」(10.0)「基本・要素」(8.0)「距離感」(6.0)

(1)「長い期間」の事例

○「皮膚癬は搔いて三年搔かいで三年かぶ三年」(なかなか・長期にわたって)

○「人の痛いの(痛さ)は三年でも辛抱する」(いつまでも)

○「火の中にも三年」：「石の上にも三年」(辛抱の三年)

上記の事例では、「他の欄」に例示されていると同様に、「三年」を「長い期間」として強調する「ことわざ」となっている。

(2)「象徴」の事例

○「春小雨夏夕立秋に日照り」(三つの調子)

○「二つ三つは可愛い盛り、四つ五つはやりだす盛り」(子ども期の象徴としての三歳・三つ)

上記の事例では、「三」の響きを象徴化している「ことわざ」となっている。「春小雨・・」は、

「三」を用いていないものの、心地よい響きの「三つの調子」がある。その上に、「春」「夏」「秋」の象徴を可視化した「ことわざ」となっている。「三つ」は「三歳」と同様に「稚児」の象徴である。「他の欄」においても同様の使い方による「ことわざ」が把握される。

(3)「短い期間」の事例

○「春に三日の晴れ無し」(短い期間)

○「百日の蒔き期に三日の刈り匂」(たったの三日間)

○「蛭二十日に蟬三日」(短い期間)

上記の事例では、「時間」としての「短い期間」のみならず、「はかない短い命」としての「短い期間」を象徴化した「ことわざ」となっている。「三日」に格別の余韻を感じさせる「ことわざ」でもある。なお、「三日」の用い方は、「ま～ん欄」において、多様なアンビバレントな意味を包含する「ことわざ」が把握される。

(4)「基本・要素」の事例

○「武士の三忘」(切り離しの三点)

○「法三章」(処罰の基本)

○「朋友に三つの要素あり」(三つの基本)

上記の事例では、物事の条件を示す「ことわざ」となっている。「三忘」「三章」「三要素」の冠としての「三」から響く概念を強調している。なお、「他の欄」では、「三宝」も「基本・要素」として用いられた「ことわざ」が把握される。

(5)「距離感」の事例

○「春の晩飯後三里」：「春の夕飯食って三里」

○「帆影三里」(遠距離)

○「船姿三里、帆姿九里」(遠方)

上記の事例では、「三里」を象徴化して「距離感」を強調する「ことわざ」となっている。「さ～そ欄」においても、同様に「三里」を用いる「ことわざ」が把握されるものの、「長い距離」のみならず「それほどの距離ではない」とする響

きの「ことわざ」もある。

7. ま～ん欄

「ま～ん」欄においては、93 事例を抽出した。象徴的な「ことわざ」を例示すると、次のようになる。5.0%以上の頻出度の高い「ことわざ」を例示すると、次のカテゴリー・コードになる。「加減（わずかな）」(20.4)「象徴」(15.1)「くりかえし」(14.0)「長い期間」(10.8)「それなりの期間」(9.7)「基本・要素」(7.5)「短い期間」(6.5)

(1)「加減（わずかな）」の事例

- 「水三合あれば大海」（わずかの量）
- 「水は三尺流るれば清くなる」（少しばかり）
- 「物に三寸の見直し」（少しは・わずかには）

上記の事例では、「三合」「三尺」「三寸」を用いて「わずかな」なる概念を強調する「ことわざ」となっている。このほか、「三足」「三日」「三分」等も、同様の概念を重ねた「ことわざ」も把握される。なお、「他の欄」では、「三尺」を「かなりの」「相当な」の響きのアンビバレントな意味を重ねている「ことわざ」もある。

(2)「象徴」の事例

- 「三つ一つに返る」（孫の稚児）
- 「三つ子に剃刀」（分別の無い稚児）
- 「三つ子の横草履」（分別の無い稚児）

上記の事例では、「三つ」を「稚児」を象徴化した「ことわざ」となっている。同様に、「他の欄」においても「三つ」が「稚児」として象徴化されている。

(3)「長い期間」の事例

- 「舞二年太鼓三年笛五年鼓八年」（長き修行の期間）
- 「無患子は三年（百年）磨いても黒い（白くならぬ）」：「無患子を三年磨く」（無駄な期間）
- 「唯識三年俱舍八年」（要する長き年月）

上記の事例では、「三年」を「いつまでたつて

も」を印象づける「長い期間」として強調する「ことわざ」となっている。「三年」の例示ではあるものの、「永遠の辛抱」「あきらめ」「無駄」等のはかり知れない「長きにわたる期間」の響きが内包されている。「他の欄」においても、同様の「三年」の用い方が把握される。

(4)「それなりの期間」の事例

- 「桃栗三年柿八年」（相応の年数）
- 「わざくれも三年」（限度の三年間）
- 「破れ鍋も三年置けば用に立つ」（いつの日にか）

上記の事例では、「三年」の概念を「それなりの期間」として重ねた「ことわざ」となっている。「(3) 長い期間」とはシームレスな時の関係にある概念ではあるものの、「やがて」「時がたてば」「そのうち」等の、「一定期間」をやり過ぎせば見通しが立つ響きを内包させた「ことわざ」である。「他の欄」においても、同様の「三年」の用い方が把握される。

(5)「基本・要素」の事例

- 「三つに従う」（基本の心構え）
- 「読み書き算用は世渡りの三芸」（必須の三条件）
- 「龍華の三会」（重要な三）

上記の事例では、「三」に重要な条件・要素の意味を組み込む「ことわざ」となっている。「他の欄」においても、同様な意味合いを込めた「三」を例示する「ことわざ」も把握される。

(6)「短い期間」の事例

- 「三日天下」（きわめて短い期間）
- 「世の中は三日見ぬ間の（に）桜かな」（あっという間）

上記の事例では、「三日」にある種のはかなさを包含した「短い期間」の「ことわざ」となっている。「瞬時にして」「あっという間に」「一気に過行く」等の響きが強調される「ことわざ」で

ある。「他の欄」においても、同様の意味合いを含んでいる「ことわざ」が把握される。

V 研究の結果と考察

資料分析の結果を基に、「三」を中核とした「ことわざ」に込められている意味世界を素描することとする。

1. 「三」の表記アラカルト

分析対象とした「ことわざ」において、「三」を例示した「表記」は以下のように多様である。「三年」「三里」「三界」「三代」「三世」「三国」「三思」「三尺」「三寸」「三秋」「三遷」「三文」「三両」「三文」「三分」「三つ」「三歳」「三度」「三回」「三人」「三顧」「三杯」「三拍子」「三宝」「三合」「三日」「三忘」「三章」「三足」「三到」「三月」「三戸」「三枚目」「三楽」「三本」「三友」「三途」「三条」「三筋」「三学」「三嘆」「三道楽」「三欠」「三益」「三荷」「三品」「三気」「三笑」「三窟」「三熟」「三食」「三足」「三石」「三船」「三損友」「三軍」「三隅」「三訳」「三釜」等々が、「ことわざ」の例示には用いられている。

なお、この他「三」を表記した「語彙」は、辞書的には数多く把握される。

2. 「カテゴリー」の頻出度傾向

25の「カテゴリー」に位置づけられる「ことわざ」の全数は526事例であり、多様である。カテゴリー別頻出には、偏りもある。登録した「ことわざ」の頻出数（比率）の多い順に、「カテゴリー」を示すと、次のようになる。

- 「加減（わずかな）」：69事例
- 「長い期間」：58事例
- 「くりかえし」：50事例
- 「象徴」：46事例
- 「そのうちの期間」：43事例

- 「短い期間」：33事例
- 「基本・要素」：31事例
- 「たとえ」：25事例
- 「多人数」：22事例
- 「常識・習わし」：21事例
- 「いたるところ」：19事例
- 「距離感」：17事例
- 「忌避」：17事例
- 「加減（ほどよい）」：13事例
- 「加減（かなり）」：12事例
- 「時の流れ」：11事例
- 「それなりの費用」：8事例
- 「リズム・拍子」：7事例
- 「しゃれ」：6事例
- 「つり合い」：5事例
- 「値打の評価」：5事例
- 「昔々の」：2事例
- 「その他」：2事例
- 「順番」：1事例
- 「不透明」：1事例

頻出数に格別な解釈上の意味は見いだせないところがあるものの、「三」をめぐる「ことわざ」の傾向を把握することができる。次のように層化できる。なお、各層における固有の意味世界の構造は必ずしも明確ではないと考える。

<上位層>

- 「加減（わずかな）」：69事例
- 「長い期間」：58事例
- 「くりかえし」：50事例

<中位層>

- 「象徴」：46事例
- 「そのうちの期間」：43事例
- 「短い期間」：33事例
- 「基本・要素」：31事例

<下位層>

- 「たとえ」：25事例

- 「多人数」：22 事例
- 「常識・習わし」：21 事例
- 「いたるところ」：19 事例
- 「距離感」：17 事例
- 「忌避」：17 事例
- 「加減（ほどよい）」：13 事例
- 「加減（かなり）」：12 事例
- 「時の流れ」：11 事例

3. 「三」のアンビバレントな響きの概念

「三」を表記する「ことわざ」は、表記の「三」が固定的な意味世界を示すものとはなっていない。「三」の概念を、文脈的に位置づけて、「ことわざ」の中にメッセージを巧妙に組み込んでいる。この結果として、例えば「三年」をめぐって、「長い期間」でもあり「短い期間」を内包することになる。「三両」「三里」「三代」「三日」等においても同様な傾向が把握される。

「三」には、一方では確定的なメッセージ性を示しながらも、他方では相反する「まぎやく」のメッセージを強調する「ことわざ」が把握される。我々の立ち位置による感覚的・印象的な受け止めの違いを映し出す「ことわざ」となっている。「アンビバレント」な響きを無理なくわれわれに伝える「ことばの表現装置」である。

4. 「三」に込められた基本メッセージ

「三」をめぐる「ことわざ」には、他の「ことわざ」とは異なる固有なる論調がある。526 事例の把握からは、次のような論調が示唆される。

一つは、「時間」に関するメッセージである。「三」の表記によって時間、期間、年限等を無理なく操作することである。「三」によって両極の時間概念が調整されている不思議さがある。

二つは、「数」に関するメッセージである。「三」は計算上の数量としては限定的である。そうで

ありながら、「主観」と「客観」、「少数・少量」と「多数・大量」の橋渡しをしている。

三つは、物事の代表、順序、順番、順位を象徴化するメッセージである。語呂合わせの調子とも重ね合いながら、絶妙にして有無を言わずの評価を伝える。「納得」の結論を誘引する。

四つは、不可欠の要素、生活・暮らし感情の基本姿勢に関するメッセージである。「ことわざ」は人口に膾炙するものであるとすると、生活者の常識、倫理、規範・道徳意識の醸成にも腑に落ちる影響力を有している。

五つは、上記「四つ」のメッセージを深掘し、あるいは発展させて受け止めるとすれば、「論理展開」「科学理論」に通底する基礎的視座なり理論仮説へのメッセージである。「ことわざ」と「研究世界」とは異次元の関係であるとの印象が残存するものの、重なり合う「思惟世界」のようにも受け止めることができる。

VI おわりに

「三」の「ことわざ」は、不思議な「求心力」と「遠心力」を内在させていることを、事例の分析から曲がりなりにも感じ取ることができた。この観点を援用すれば、例えば、「教育科学」「自然科学」をはじめとした諸科学分野において、「三」を文化・科学的遺伝子とした理論仮説が設計されていたり、設計されたりするのではないかとの憶測をするのは、飛躍であろうか。

ちなみに、「三つの学力」「三次元」「三段論法」「三乗根」「三民主義」「三権分立」「三重奏」「3R's」「三角点」「三原色」「三脚」「フレミング」「三角関係」「三回忌」「三密」「一流・二流・三流」「金・銀・銅」「一人称・二人称・三人称」「男性名詞・中性名詞・女性名詞」等といった概念が広領域で、不自然なく用いられている。「三」を操作概念として用いるのは偶然のことでもなさそうで

ある。このような関心や視点を持ち、「幼児期の教育・保育」の解き明かしを試みる機会を今後
に持つこととする。²⁾

注および引用文献

- 1) 田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅰ）－子ども存在・概念をめぐって－」京都文教短期大学『研究紀要・第56集』、33-44、2018年
／田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅱ）－modeling & mirror-neuron－」京都文教短期大学『研究紀要・第57集』、1-11、2019年
／田中亨胤「英知としての諺・格言に潜在する教育視座（Ⅲ）－超越的存在から示唆される生き方としての視座－」京都文教短期大学『研究紀要・第58集』、11-22、2020年
- 2) この点に関しては、以下の文献において、田中が試行的に分析を行っている。田中亨胤『保育の基本・用語集』、ひかりのくに、1-112、2013年

カテゴリー一覧

欄 カテゴリー	あ～お	か～こ	さ～そ	た～と	な～の	は～ほ	ま～ん	総 計
長い期間	2 (2.5)	6 (14.3)	28 (13.2)	3 (9.4)	2 (12.5)	7 (14.0)	10 (10.8)	58 (11.0)
短い期間	4 (4.9)	4 (9.8)	7 (3.3)	5 (15.6)	2 (12.5)	5 (10.0)	6 (6.5)	33 (6.0)
それなりの期間	17 (21.0)	6 (14.3)	7 (3.3)	3 (9.4)	0	1 (2.0)	9 (9.7)	43 (8.0)
時の流れ	7 (8.6)	0	0	3 (9.4)	0	1 (2.0)	0	11 (2.1)
距離感	0	1 (2.4)	10 (4.7)	2 (6.3)	1 (6.3)	3 (6.0)	0	17 (3.2)
くりかえし	4 (4.9)	1 (2.4)	23 (10.8)	1 (3.1)	3 (18.8)	5 (10.0)	13 (14.0)	50 (10.5)
いたるところ	3 (3.7)	1 (2.4)	13 (6.1)	0	0	2 (4.0)	0	19 (4.0)
加減 (かなり)	2 (2.5)	0	4 (1.9)	2 (6.3)	0	2 (4.0)	2 (2.2)	12 (2.3)
加減 (わずかな)	3 (3.7)	2 (4.9)	24 (11.3)	7 (21.9)	7 (43.8)	7 (14.0)	19 (20.4)	69 (13.1)
加減 (ほどよい)	3 (3.7)	1 (2.4)	9 (4.2)	0	0	0	0	13 (2.5)
つり合い	0	0	5 (2.4)	0	0	0	0	5 (1.0)
多人数	2 (2.5)	0	14 (6.6)	0	0	2 (4.0)	4 (4.3)	22 (4.2)
常識・習わし	11 (13.6)	2 (4.9)	5 (2.4)	0	0	2 (4.0)	1 (1.1)	21 (4.0)
たとえ	6 (7.4)	1 (2.4)	14 (6.6)	1 (3.1)	0	0	3 (3.2)	25 (5.0)
象徴	3 (3.7)	2 (4.9)	20 (9.4)	1 (3.1)	0	6 (12.0)	14 (15.1)	46 (8.7)
しゃれ	1 (1.2)	2 (4.9)	1 (0.5)	1 (3.1)	0	0	1 (1.1)	6 (1.1)
リズム・拍子	1 (1.2)	3 (7.3)	0	0	0	1 (2.0)	2 (2.2)	7 (1.3)
基本・要素	5 (6.2)	0	11 (5.2)	3 (9.4)	1 (6.3)	4 (8.0)	7 (7.5)	31 (6.0)
値打の評価	1 (1.2)	1 (2.4)	1 (0.5)	0	0	1 (2.0)	1 (1.1)	5 (1.0)
それなりの費用	3 (3.7)	5 (12.2)	0	0	0	0	0	8 (1.5)
忌避	2 (2.5)	0	14 (6.6)	0	0	1 (2.0)	0	17 (3.2)
昔々の	0	1 (2.4)	1 (0.5)	0	0	0	0	2 (0.4)
順番	0	0	1 (0.5)	0	0	0	0	1 (0.2)
不透明	0	0	1 (0.5)	0	0	0	0	1 (0.2)
その他	0	1 (2.4)	1 (0.5)	0	0	0	0	2 (0.4)
合計	81 (100)	41 (100)	212 (100)	32 (100)	16 (100)	50 (100)	93 (100)	526 (100)